
夜の扉

杉山翔悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の扉

【Nコード】

N8031C

【作者名】

杉山翔悟

【あらすじ】

過去を変えたいそんな妄想が爆発ですよければ暇つぶしにでも・

崎谷功の場合

いつのまにか料理の腕は上達したし、掃除や洗濯も何の苦もなくこなせる。だから淋しいとか不便だとか考えたことはない。

もちろん、俺もいつぱしの男だからまったく女性に興味が無いワケでもない。過去には一緒に居たいと思える女性もいた。

ただ、その人はもう枕元の写真の中だけの人になってしまった。俺の目の前で、全ては奪い去られてしまった。今でも一人でいるのは、少なからず彼女の存在があつたからだろう。

時計をみるとすでに真夜中だ。早く寝ないと、明日も仕事がある・・。

.....

目を覚ましてまず目に入つたのは白い空間だった。

しばらく意味が分からずにぼんやりと眺めて、やっぱり意味が分からず体を起こした。ただ、明らかに自分の部屋じゃない。見渡すかぎり何もないのだ。

「こんばんわ」

「!?!」

いきなり声をかけられ、驚いて声の方に向く。

そこには微笑みをうかべた少年が一人立っていた。何も言えずに立ち尽くしていると、不意に彼が口を開いた。

「ここは境夢です」

「ケイム?」

「境の夢と書きます。ここは、眠りと夢の境にある場所なんです」
「?」

意味が分からない。俺はいつもと同じように自分の部屋で眠りについたので。それが何故こんな場所にいる?

「あなたがここにいるのは、あなたが過去に強い後悔と未練を持っていると言つことです。」

彼の言葉はまるで答えになっていない。混乱するばかりだ。だがそんなことはお構いなしとばかりに、一言俺に尋ねた。

「その未練を断ち切りませんか？」

「・・・どう言う意味だ？」

そう聞き返すと、彼は楽しそうに答えた。今度のは意味も理解できる。

「過去を、変えませんか？」

辺りに広がるのは真っ白な世界。その世界と同じくらい頭の中も真っ白になっている。

「変えられるのなら、変えたい」

それでも俺はその言葉に縋った。

答えた後彼は最初と同じ微笑みに戻り、静かに言った。

「後ろの扉が、あなたが戻りたい場所につながっています」

後ろには何も・・・と振り返ると、そこには確かに扉があった。両開きの大きな扉。ただ、扉の横には壁は無く、白い空間に扉だけがぽつりと置かれている。

「えーっと？どこで○ドア？」

「・・・著作権は怖いですよ？ちなみにそのギャグ、あなたで3人目です」

「そんな真剣に答えなくても・・・」

この時すでにこれが夢かどうかなんてどうでも良くなっていた。一度真っ白になった頭には、彼女を助けたいという思いだけがぐるぐると回っていた。

一息を吐いて、ドアノブに手をかける。

「一つ、注意があります。」

そのままの体勢で顔だけを声のほうに向ける。

（今行くつもりだったんだけどな）

「そう言わず聞いてください。」

（・・・何も言っていないんだけど？）

「あなたが出来るのは“守る”か“諦めて守る”かを選ぶことです。そして、その時には“猶予”が与えられます。」

「いまいち意味が分からないんだけど？」

「その時になれば分かります。」

「・・・そっか。」

こんどこそ、と改めて扉を見る。

扉を開き、俺はゆっくりと中へ進んでいく。

よい夢を

彼がそう言ったのを聞いた気がした。

.....

鳥が鳴く声がする。

・・・なんだ、やっぱり夢だったのか。

目を開くと見慣れた天井が広がっていた。もう一度目を閉じて深く息を吐く。

（つて、あれ？）

今見た天井、確かに見覚えのある天井だ。けど、今俺が住んでいる部屋の天井とは違う。

今度は恐る恐る目を開く。これは・・・

「実家の天井だ！」

叫びながら飛び起きてキョロキョロと辺りを見渡す。

（俺の部屋だ・・・）

うん、とりあえず落ち着こう。夢かどうかを確かめるには？

古典的ではあるが仕方ない。右手で自分の頬をつかみ、

思いっきりねじった。

「つてえええええ！」

あまりの痛みに思わず叫んでしまった。

確かに夢かどうかはどうでも良くなっていたが、いざこうなってみると混乱する。

部屋を出ると、やっぱり実家だった。あわあわしながら階段を半分くらい下りた所でぐらりと視界が歪んだ。

（あれっ？）

残りの半分は体全体を使いながら一気に下りることに、もとい落ちる事になった。

「あたたたた・・・」

体のあちこちを打ってしまったようだ。

「何やってんだ？」

頭の上から振ってきた声は聞き覚えがあった。

「親父？」

「なんだよ、寝呆けてんのか？俺以外に誰がいるってんだよ」

「手え貸してくれるとか無いのかよ・・・」

おお、そりゃ気づかなんだ、と言う台詞とともに差し出された手に掴まって、なんとか体を起こす。

痛っ……

あまりの痛みに思わず顔が歪んだ。

「どうした？」

「あー、なんか手首捻ったみたいだ」

右の手首にズキズキと鈍い痛みが走っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8031c/>

夜の扉

2010年10月24日13時57分発行